

✠030 ヴィア・ドロローサ Via Dolorosa 「苦難の道」

四福音書やキリスト教の伝承などから想定されるイエス・キリストの最後の歩みのこと（ラテン語：

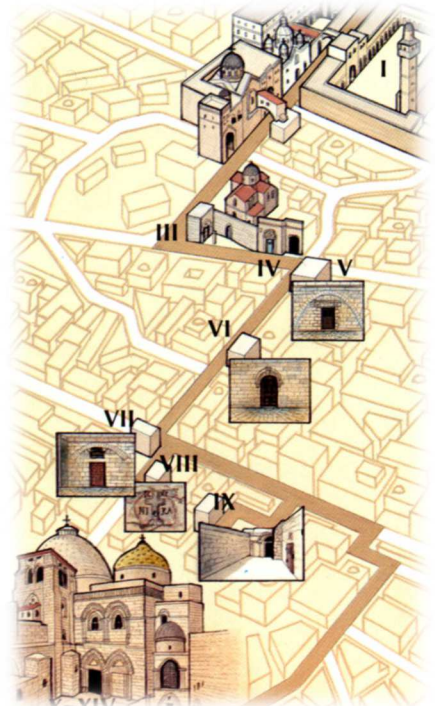


Via Dolorosa)。イエスは十字架を背負って総督ピラトの官邸（プラエトリウム）から刑場のあるゴルゴダの丘までの道のりを歩いたとされている。共観福音書（四福音書の内、ヨハネ伝を除くマタイ、マルコ、ルカ）では、途中でキレネのシモンがイエスに代わって十字架を背負ったと書かれている。ヴィア・ドロローサという名称は、その道中に味わったイエスの苦難を偲んで名付けられており、ヴィア・クルキス（via crucis/十字架の道）とも呼ばれている。

イエスの処刑からおおよそ二千年後の現在の地理上では、始発点はエルサレム旧市街北東のイスラム教地区にあるライ

オン門付近、終着点は旧市街北西のキリスト教地区の聖墳墓教会内にあるイエスの墓である。その間、始発点と終着点を含めた計十四箇所に「留」（りゅう）と呼ばれる中継点が設けられており、第9留までが旧市街の入り組んだ路地の途中に、残り5つが聖墳墓教会（エルサレム旧市街《東エルサレム》）にあるキリストの墓とされる場所に建つ教会で、ゴルゴダの丘はこの場所にあったとされる。）の内にある。

聖句：マタイ 27 章、マルコ 15 章、ルカ 23 章、ヨハネ 18:28



ヴィア・ドロローサの14留（14ステーション）

①死刑判決⇒②十字架を背負わされる⇒③十字架の重みで倒れる⇒④母マリアに会う⇒⑤キレネ人シモンがイエスに替わって十字架を背負わされる⇒⑥女性ペロニカがイエスの顔を拭く（聖書に記述はない）⑦2度目に倒れる⇒⑧悲しむ女性たちを慰める⇒⑨3度目に倒れる⇒⑩衣を脱がされる⇒⑪十字架に付けられる⇒⑫十字架上で息を引き取る⇒⑬アリマタヤのヨセフ、イエスの遺体を引き取る⇒⑭埋葬される（⑩から⑭までは聖墳墓教会の中）

✠ 十字架上のキリストの最後の 7 つの言葉

イエス・キリストが磔刑に処せられた際に十字架上で語ったとされる、福音書に記述されている七つの言葉。

✠ 第一の言葉

〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」〕人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。(ルカの福音書 23 : 34)

⇒午前9時に十字架につけられた時の言葉である。新共同訳聖書では真正性を疑われるものとして、カッコ書きされている。しかし、ステファノの殉教(キリスト教における最初の殉教者、使徒 7 : 54 ~ 60) は本節を前提にしていること、ルカの神学とキリストの精神に調和していることから、真正性を認めている。

⇒参考 : 使徒言行録 7 : 60

それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。

✠ 第二の言葉

するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた。(ルカの福音書 23 章 43 節)

✠ 第三の言葉

イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。(ヨハネの福音書 19 : 26 ~ 27)

⇒母マリアと弟子のヨハネに言った言葉で、ヨハネにマリアを支えることを依頼したもの。これにより、ヨハネがマリアを引き取ることになった。イエスの言葉を聞いた、その時点から、ヨハネはイエスの本意を理解して、マリアをつれて十字架のそばを離れて、エルサレムの自分の家につれていったと思われる。

✠ 第四の言葉

三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。(マルコの福音書 15 : 34)

三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。(マタイの福音書 27 : 46)

⇒三時時頃にキリストが大声で語った。大声と言うのは全地に響き渡っていくという意味がある。詩篇 22 篇と関連のある言葉である。神への呼びかけは、マルコではアラム語の「エロイ」、マタイではヘブル語の「エリ」である。周囲の人々がエリヤを呼んでいると誤解したので、マタイの記述が一番近いと思われる。多くの解釈では、詩篇 22 篇からの引用であるとしているが、より少数の解釈では、詩篇 22 篇からの引用ではなく、神がイエスを見捨てた事を指しているとしている。伝統的

にはイエスが事実上、罪人の身代わりになって罪の裁きを受けたことを表す叫びと解釈される。イエスが神を「父」とは呼んでおらず、審判される側に立ち、自己を罪人と完全に一つにして、神の裁きを受けているとされている。

参考：詩編 22：2

わたしの神よ、わたしの神よ／なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず／呻きも言葉も聞いてくださらないのか。

✠第五の言葉

この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。(ヨハネの福音書 19：28)

⇒イエスは聖書が成就するために、この言葉を発した。これは、詩篇 22：16、詩篇 69：22 もしくは詩篇 42：3 の成就であると考えられている。この言葉を兵士は、肉体的な渇きであると理解して、酸いぶどう酒を持ってきた。

参考：詩編 22：16

口は渴いて素焼きのかけらとなり／舌は上顎にはり付く。あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる。

参考：詩編 69：22

人はわたしに苦いものを食べさせようとし／渴くわたしに酔を飲ませようとしています。

参考：詩編 42(-043)：3

神に、命の神に、わたしの魂は渴く。いつ御前に出て／神の御顔を仰ぐことができるのか。

✠第六の言葉

イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

(ヨハネの福音書 19：30)

⇒兵士達が差し出した酸いぶどう酒を受けた直後に、この言葉を語った。これは、旧約聖書の預言をすべて成就して、贖罪の業を完成したという意味である。

✠第七の言葉

イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。

(ルカの福音書 23：46)